

新生艦船課元年



道面 敏彦

課長在職期間 昭和63.3.16～平成1.8.1

昭和63年3月16日付、海幕艦船課長の発令を受け、大湊造修所長から同年3月17日海幕に着任した。課長在任中（昭和63.3.16～平成1.8.1）の多難を思わせるかのように着任当日の朝刊各紙は、護衛艦「きり」クラスの2番マスト問題を報じた。艦船課課員一同は、違和感なく私を迎え入れてくれたように感じた。

海幕技術部の改組も予定通り進行しており、50数名の課員も、12月には18名が減員されることとなり、部屋も新技術部との仕切りが入ると聞かされ、多少のショックを受けた。後日の話となるが、装備部艦船課は誠に狭い部屋となり、課員も減ぜられ、課長の机は、南の窓側から北の窓側となり、気苦勞の多い仕事が山積していた。

(1) 海幕技術部改組（63年12月、装備部艦船課となる。）

従来の子量班、保船班、潜水艦班がなくなり、艦船班と技術各班での分担作業となった。63年12月以降、課員はよく耐え、立派に業務を遂行した。

(2) 護衛艦「きり」クラスの2番マスト問題

先に述べたように、新聞報道された為、会計検査院の注目するところとなり、仕様変更の有無について長期間（約1年）の調査に対応せざるを得なかった。本件に関しては、当時の船体班長と建造班長が実に長期間にわたり立派に対応した。

(3) 潜水艦「なだしお」事故（63.7）

海幕事故調査委員会の為の「なだしお」の調査と相手側漁船の調査に大変なエネルギーを消費したが良い結果には至らなかった。但し、当時の船体班長をはじめ班員一同は、昼夜の別なく精励した。今思っても頭の下がる思いがする。

(4) 潜水艦「うずしお」の廃艦に伴う主蓄電池の処置について

本件が会計検査院の調査対象となり、長期間にわたって調査に対応した。相手側とは、終始論理がかみ合わず、当時の潜水艦班長をはじめ、班員と保船班長に苦勞をかけたが、ストレスの多い後ろ向きの作業であった。但し、関係各部のご尽力により国会報告に至らなかったのは幸いであった。

(5) その他艦船事故等

何故かこの時期（63年度）に水上艦のみならず潜水艦の運用事故が多く発生し、技術各班は、各造修所との調整によく立派に対応した。イージス1番艦をはじめ、「きり」クラスの建造も進み、63年12月以降は、艦船課は少数精鋭で行かざるを得なくなった訳であり、約1年4ヶ月間艦船課長の席にあり、色々の問題等解決のためにエネルギーを傾注できたのも各課員のおかげであると往時を思いながら感謝している今日この頃である。

(終)

艦船技術会会報（平成13年4月 第32号）から